

日本基督教団
柿ノ木坂教会

牧 師 渡邊 義彦
協力牧師 松下 恭規

教 会 報

190号 2018年 11月 18日

〒152-0022

東京都目黒区柿の木坂

1-31-19

電話：03-3717-3870

Fax：03-3717-3916

巻頭言

「キリストの恵みがあなたがたと共に」

——フィリピの信徒への手紙第4章 21～23節——

牧師 渡邊 義彦



キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たちに、よろしく伝えてください。わたしと一緒にいる兄弟たちも、あなたがたによろしくと言っています。すべての聖なる者たちから、特に皇帝の家の人たちからよろしくとのこと。主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように。（新共同訳聖書）

パウロは、手紙の最後に、「カイサルの家の人たち、皇帝の家の人たちからよろしく」と、あいさつをフィリピ教会の人々に伝えます。「カイサルの家の人たち」というのはローマ皇帝に仕える者たちの総称です。皇帝のごく近い家族、肉親から、政治的に最も近い側近、中央に、またそれぞれの帝国都市に置かれた官僚たち、各地に配属された数多の兵士たち、そして、事業、商業において皇帝に仕え働く者たち、また最下層において最も賤しい下働きをする奴隷まで、すべてがカイサル・ファミリーです。ここでパウロが、どの人たちを指して「カイサルの家の人たち」と呼んでいるのかははっきりとしません。パウロが、この手紙を獄中から書き送っていることを考えるなら、この牢獄を監視している看守たちもカイサルの家の人たちですし、パウロが裁判の判決を目前にしていることを考えるなら、裁判に携わる裁判人たちも、役人たちもカイサルの家の人です。罪人として囚われている囚人たちの世話をする奴隷もいたことでしょう。また、パウロの監禁のために祈っている教会には、さらに多く帝国の働きに従事する地位の高い者たちも、地位の低い者たちもいたに違いありません。

主イエスの十字架の事件からまだ 30 年と経っていない時代に、皇帝に仕える働きをする者たちの中に少なからぬキリスト者が既に誕生していたということは、アジアのひとつの小さな町から発信された主イエス・キリストの福音が、急速に帝国内に伝えられて、皇帝に対する礼拝を強要される社会的な環境下でありながら、唯一の神、唯一の救い主キリストを礼拝する民が、帝国組織の中に上にも下にも起こされはじめていたほど福音伝道が進展していたことを示しています。

使徒パウロが手紙を送ったフィリピ教会は、使徒のヨーロッパ伝道、最初の建設教会です。フィリピの町の外れを流れるガンギテス川のほとりのユダヤ人の祈りの場でのルディアという女性との出会いが発端となって、パウロのヨーロッパ伝道、第一号の教会が建設されました。パウロのフィリピ滞在期間は、使徒言行録を読んでも、どのくらいであったかはわからないのですが、何年にも亘るような長い滞在ではなかったはず。例えばコリント滞りが1年6ヶ月に亘ったと使徒言行録で報告され、滞在が長期になったと特別に記されているように、大概の場合は、短ければ、いくつかの安息日、主日だけ滞在し、長くても数ヶ月の滞在で、伝道者たちは教会の基礎が据えられて教会の責任を任せる者たちが任命されると、次なる伝道地へと進み福音を先に先に運んでゆきました。

フィリピ伝道の場合は、ルディアとの最初の出会いが川岸の祈りの場であったと言われてるように、この町ではユダヤ人共同体は、まだ大都市にあるユダヤ人共同体のように会堂を持

つには至っていなかったということではないかと思えます。その中で、ルディアの家は、彼女は紫布という高級布地を扱う商いをしていましたから、裕福な家庭であったことが知られますが、彼女の家が最初の伝道基地となってフィリピ教会は急速に教会建設が進んだのでしょう。ここで言わんとしている教会建設というのは、単なる建物の建設ではなく、伝道が進展し受洗者が生み出されキリストの名によって呼ばれることを喜ぶ民が増し加えられて、さらに福音伝道が推し進められてゆくことを言っています。神が、川岸での小さな発端を大きく用いてくださって、使徒がフィリピ教会をいよいよ去ることになって次の伝道地に向かうことになったときには、パウロの新たな伝道を支えるまでに彼らは教会建設を進めていたのです。

この手紙の中で、使徒パウロは、十字架のキリストへの信仰に支えられて将来の確実な希望を確信して大胆にこう言いました。

「なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召してお与えになる賞を目指してひたすら走ることです」(3章13～14節)。

さらに使徒は、救いの完全なあらわれに与ることをこのように告げました。

「わたしたちの本国は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、わたしたちは待っています。キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです」(3章20～21節)。

御子キリストが十字架に御自身をお献げになるという仕方で、血をもって、裂かれた体をもって、罪にまみれて腐ってしまっていたわたしたちを救ってくださることによって、何ひとつ違うことなく保証されている将来に与る救いの約束に、使徒もまたすべての希望を置いていたので、使徒として、伝道者として、キリスト者として、兄弟姉妹たちを、キリストの教会を力づけ励ますことができました。パウロは、将来の救いに確かな希望を置いて、今の救いを確信して兄弟姉妹たちにこう申します。

「だから、わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち、使徒は、手紙の終わりに、まるで兄弟、姉妹がこのように主によってしっかりと立ちなさい」(4章1節)。

そこにいるかのようにして、彼ら彼女たちの顔を一人ひとり思い起こすかのようにして最後のあいさつを告げます。

キリストに結ばれて、たとえ時間的にも、空間的にも離れていようとも、使徒パウロと同時代に生きた兄弟姉妹にとっては空間の隔たりであり、使徒の後の時代をそれぞれの伝道地で生きるキリスト者たちにとっては空間も時間も大きな距離をもって聞かれる言葉でありながら、キリストに結ばれてひとつとされている一体性にはいささかもわずかばかりも隔たりが生じてはいません。一切の隔たりが生じないのは、使徒パウロが死んだとしても、シラス、テモテ、伝道者たち、エパフロディト、エボディア、そしてシンティケ、教会の兄弟姉妹たちが死んだとしても、教会を生み出したルディアが既に死んだとしても、彼ら、彼女らを結ばれてひとつとされた、主イエス・キリストが、いつの時代にも、どのようなところにあっても生きていてくださるからです。主の名によって呼ばれる者たちを、時空を超えて、主イエス・キリストがひとつにしてくださるからです。主の恵みが、いつも、キリストの名をもって呼ばれる者たちの霊をひとつとしてくださるのです。わたしたちは、主の恵みの果てを、到底、見極めることができません。それは神の愛が限界を持たないことに由来した恵みであるからです。パウロは、最後に祈ります。この祈り、この祝福は、歴史に耐えて、時代を超えてしまう祈りです、祝福です。最も善きことを兄弟、姉妹のために祈る祈りのです。

「主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように。アーメン。」

集会出席統計（月平均人数）

	2018年	
	9月	10月
主日礼拝	79.6	87.5
聖書と祈り会	13.8	12.8
教会学校*	103.0	100.0

* 保護者、教師を含む

(第1主日開催)	9月2日	10月7日
聖餐夕礼拝	17	15

☆☆☆ 教会の行事 ☆☆☆

☆クリスマスのご案内

今年の教会のクリスマスは、下記の通りです。

クリスマス主日礼拝

12月23日(日) 10:30~11:45

クリスマス愛餐会

12月23日(日) 12:30~14:00

聖夜(クリスマス・イヴ)礼拝

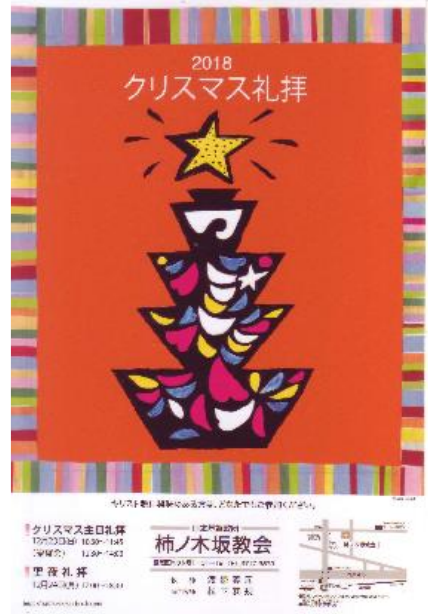
12月24日(月) 17:00~18:30

第1部:礼拝 第2部:祝会

ハンドベル、聖歌隊の演奏、そして、

一緒にクリスマスの歌を歌いましょう。

どなたでも、おいでください。



☆その他のクリスマス関連行事

12月5日(水) 13:30~ 新生会、いずみ会アドヴェントの集い

12月7日(金) 10:00~ ベテル幼稚園保護者のためのクリスマス礼拝

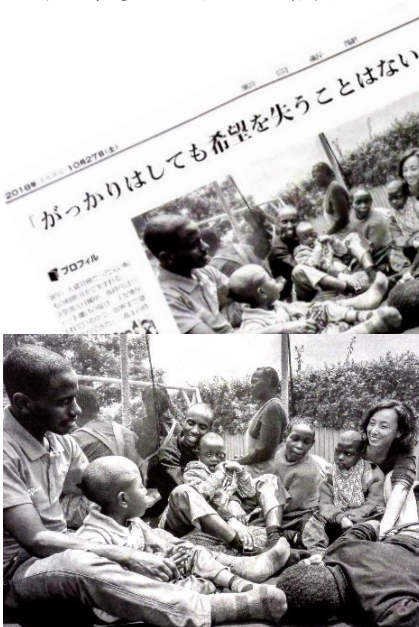
12月13日(木) 10:00~ ベテル幼稚園 クリスマス礼拝・ページェント

12月23日(日) 15:30~ 教会学校 クリスマス礼拝・ページェント

♡ トピック ♡

ご覧になった方も多いと思いますが、朝日新聞10月27日土曜版「be」の「フロントランナー」に、柿ノ木坂教会員・公文和子姉のケニアでの活躍が、紹介されました。教会報189号にも掲載した「シロアムの園」に関するものです。たことは、本当に嬉しいですね。

「がっかりはしても希望を失うことはない」
公文 和子 49歳



「待ち望むこと」

東京神学大学神学生 川嶋 章弘



教会報 190 号は、11 月の半ばに発行されると伺っています。皆さまが、この原稿を目にする頃には、教会の暦では一年の終わりを間近に控えていることと思います。今

年度は、12 月 2 日に待降節第一主日を迎えます。待降節は、主イエス・キリストのご降誕を待ち望む期節です。私たちは、この待降節をどのような気持ちで過ごしていますでしょうか。また、どのような祈りをもって過ごしていますでしょうか。

待降節を迎えると、教会学校では、毎年、ページェント礼拝の練習が始まります。子どもたちは、真剣にページェントの練習に取り組みつつ、クリスマスが近づいてくることに、どこかワクワクした気持ちを抱いているのではないかと思います。教会学校だけではなく、教会全体が、降誕日を待ち遠しく感じながら、喜びの日への備えのときとして、待降節を過ごしているのではないのでしょうか。

待ち望むこと。「まだかな」。「もうすぐだよね」。待ち望むことは、そのような期待に心を膨らませることに違いありません。けれども、他方で待ち望むことは、忍耐を必要とすることであるともいえるのではないのでしょうか。教会の暦では、待降節第一主日から、今年度であれば、三週後の主日には降誕日礼拝を迎えます。ですから私たちは、待降節を迎えれば、三週後に降誕日を祝うのだと分かっているわけです。けれども、いつ待ち望む日が来るのか分からないとしたら、「待ち望むこと」は、ただ期待に胸を膨らませるだけでは済まないように思えます。

旧約聖書エレミヤ書 33 章 14-16 節に、次のような言葉があります。

見よ、わたしが、イスラエルの家とユダの家に恵みの約束を果たす日が来る、と主は言われる。その日、その時、わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる。彼は公平と正義をもってこの国を治める。その日には、ユダは救われ、エルサレムは安らかに人の住まう都となる。その名は、『主は我らの救い』と呼ばれるであろう。

(エレミヤ書 33 章 14-16 節)

神の民は、主が「恵みの約束を果たす日が来る」のを待ち望みました。「その日、その時」を待ち望みました。「わたしはダビデのために正義の若枝を生え出でさせる」とありますが、「若枝」はメシア（キリスト）を指し示すと考えられてきました。メシア（キリスト）を待ち望む。言葉にしてしまうとあまり実感が湧きませんが、イエスさまがお生まれになるのは、エレミヤの預言から 400 年ほど後のことです。神の民は、400 年の間、キリストを待ち望み続けました。世代を越えて、ときには苦しみや悲しみの中で嘆き、ときには他国の支配に耐え忍び、それでも主に祈り続けて、キリストが来られるのを待ち望み続けたのです。

* * *

私が、献身の志を与えられて、東京神学大学に入学したのは 2009 年でした。学部の三年次に編入学いたしましたので、順調に進んでいけば、4 年後には大学院を卒業していたこととなります。しかし、実際には 10 年の時を必要としました。献身者にとって、東京神学大学で学ぶことは、もちろんとても重要な期間です。しかし、神学生はだれもが、大学と出席教会で学びのときを過ごしつつ、遣わされる日を「待ち望んで」います。遣わされる場所は、教会だけでなく、学校であることもあり、病院であることもありますが、いずれにせよ、主が示されたところへ

と遣わされるのを待ち望みつつ歩んでいるのです。

私は、大学院に進学したときに、柿ノ木坂教会に転会させていただきました。2013年のことです。やはり順調に歩みを進めていけば、2年後には、柿ノ木坂教会から巣立っていたはずですが。しかし今年で、柿ノ木坂教会に転会して6年になりました。この一年半は、多くの方に支えられつつ、歩みを前に進めることができました。しかしそれ以前は、時には歩みがまったく前に進んでいないときがあり、時にはむしろ自分の歩みは後退しているのではないだろうかと思うこともありました。大学院に進学したときは、ごく当然のこととして、2年後に遣わされることを待ち望んでいました。けれども、立ち止まらなくてはならなくなり、そして、いつまた歩みを再開できるか分からない日々を過ごす中で、「いつ遣わされる日を迎えることができるのだろうか?」「いつまで待たなくてはならないのだろうか?」「遣わされる日は来ないのではないか?」そのようなことを思わずにはいられませんでした。

かつての同級生が、伝道の最前線に遣わされるのを見送りながら、焦りや不安を感じなかったと言ったら嘘になるでしょう。いつ「その日、その時」が来るのか分からない中で待ち望むことは、期待に心を膨らませるよりも、むしろ苦しい忍耐であったように思います。しかし「その日、その時」など来ないのではないかと疑いの心が生じるときに、しばしば想い起こしたのが、神の民がいかに長い時間を耐え、救い主が来ることを待ち望んでいたかということです。神の民が、救い主が来ることに確信と希望を持っていたことは間違いありません。しかし、そうであったとしても、神の民が「その日、その時」を待ち望みつつ、どのようにして過ごしたのだろうか、どのような祈りをもって歩んでいたのだろうか、聖書を読みつつ想像しました。

この一年半、心に留まり続けている聖書箇所があります。ヨハネによる福音書5章5-9節です。

さて、そこに三十八年も病気で

苦しんでいる人がいた。イエスは、その人が横たわっているのを見、また、もう長い間病気であるのを知って、「良くなりたか」と言われた。(中略) イエスは言われた。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」すると、その人はすぐに良くなって、床を担いで歩きだした。

(ヨハネによる福音書5章5-9節)

私は、今年で39歳になりました。私は、39年間、床に臥せっていたわけではありませんが、38年間、病気で苦しんでいた人の中に、自分を見いだすことがあります。イエスさまは言われました。「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」イエスさまは、このみ言葉を私にもお与えくださいました。「その人はすぐに良くなって」とありますが、私は、このことは必ずしも医学的に病気が完治したことを意味するのではないのではないかと考えています。しかしそれでも、この人は「床を担いで歩きだした」のです。私も、待ち望んでいた日に向かって、再び歩みを進めることが許されました。

私が、遣わされる日を待ち望んでいたことを述べさせていただきました。けれども、私と同じくらい、いえ私自身以上に、渡邊牧師、そして柿ノ木坂教会の皆さまが、私が遣わされる日を待ち望んでいたことに気づかされます。どれほどのお祈りと忍耐をもって、待っていてくださったのかを想わずにはられません。皆さまのお祈りとお支えなしには、遣わされる日に向かって、再び歩みを始めることはできなかったと思います。心より感謝申し上げます。

そして、なにより主が待っていてくださいました。前に進めないときも、後退しているように思えるときですら、主は、すべてをご存知で待っていてくださいました。

「起き上がりなさい。床を担いで歩きなさい。」

待降節を迎えようとしています。改めて、主を「待ち望むこと」に想いを巡らしつつ歩んでいきたいと願っております。

「秋の例会の司会を担当して」

原島 正

榿の木会は、教会の壮年男子の集いです。会の名称は、聖書に由来します。新共同訳聖書の『聖書辞典』（新教出版社）には「榿の木」について次のように記されています。少しだけ引用します。

「旧約に出てくるパレスチナにおける代表的な木のひとつ。・・・大木となり（サム下 18:9-、ホセ 4:13）、強いことの象徴とされた（アモ 2:9）。それゆえ、これが枯れることは、主の裁きのしるしと考えられた。（イザ 1:29-30）」。

ここ数年、例会を年二回、春と秋の第五聖日の礼拝後に開催しています。テーマは各例会で違いますが、一年同じテーマのときもあります。今年の春の例会のテーマは、「身体よみがえりとエンディングノート」でした。お二人の方に発題をお願いいたしました。秋の例会は「老年期の心と信仰」のテーマでした。精神科医であり、私たちの教会の長老である石丸昌彦さんからお話を伺いました。

キリスト教は「身体」を大切にす宗教です。心の持ち方を重んじる宗教ではありません。「身体」は、私たちの人格そのものです。私たちは身体として生かされております。私の身体ですから、身体は私の持ち物のように考えますが、身体は私そのものです。したがって私を大切にすることは、私の身体を大切にすることです。なぜ身体を大切にしないといけないのでしょうか。身体は、まさしく神様からの頂きものですが、身体ほど脆いものはないからです。とりわけ加齢とともに身体は病身となります。年齢とともに、自分の身体が思うように動かなくなります。疲れやすくなるだけではありません。身体が醜くなるのは事実です。身体の老化現象を受け入れたくありません。こうした身体の問題は心のそれでもあります。心身一如です。心の悩み

が身体の症状として顕れ、身体の不調が心のそれとして顕れます。心と身体は結びついています。とくに老年期の身体の問題は、心の問題です。不如意となる身体を心が支えきれなくなります。自分の身体の衰えを心が受け止められなくなります。老年期の心の問題は深刻です。以上は司会を担当した私の趣旨説明です。

石丸さんは来年に開催される教会婦人会連合 50 周年全国集会の分科会で「老いと祝福」について発題をされる予定とのこと。そこで私たちに老いにもなう祝福とは何か、と問われました。私たちはとかくすると老いを消極的に捉えてしまい嘆くことしばしばです。しかし私たちの生涯のすべてのときに祝福が用意されています。石丸さんは、発達心理学の研究者としての有名なエリク・エリクソンの著書『老年期』に記されている「人は最後に人生への感謝を問われる」を紹介され、老いを迎えた人々には、その心に感謝の思いをいただきつつ、生きる課題があるとされました。課題は恵みです。ドイツ語では課題は Aufgabe、恵みは Gabe です。課題が与えられていることが恵みであり、祝福です。

さらに、石丸さんは、御母堂の葬儀を司式された宮庄博牧師が聖日の礼拝節説教で高齢の方々の大事な役割には次の二つのことがある、一つは「語り伝えること」、もう一つは「祈ること」であると言われたことを紹介されました。高齢者には、その方だけの人生経験があり、その経験を語り伝える使命があります。若い人には、その経験を聞く義務があります。さらには、祈ることです。加齢とともに身体は不自由となり、寝たきりになることとなります。しかしそうした状況にあっても「祈ることなら」できます。祈るときとして、そのときが備えられています。寝床は祈る場所で

す。その場所を大いに活用したいものです。

若い人たちは、人生の先輩たちに感謝しつつ、「その背を追って『変』を楽しみつつ老いていきたい」とも言われました。石丸さんの御母堂はごく最近、天に召されました。94歳でした。遺された御尊父は悲しみの中にあっても、前向きに状況を受け入れられ変わられたと、のことです。石丸さんは、『易経』の「窮すれば通ず」、正しくは「窮即変、変即通」ですが、「変わったときに道が通じる」「事情が変わるときには、自分が変ることができればよい」ことを教えられ、「お父様は、柔軟かつ楽天的である」とのことです。さらに「変わってはいけないのは、信仰です。その他のものは、変わるのです、変わってよいのです」と言われたことに感銘を覚えました。変わることは成長だとすれば、私も「変」を楽しみに年を重ねたいと思います。けれども楽しんで「変わる」ことは、難しい課題です。

かつて教師をしておりましたとき、学科主任の先生が、新生入生に「皆さん、これからの学生生活で変わってください」と勧められたことを思い出します。変わるの若いときだけではありません。人生のすべてのときに変わります。「生きる」ことは「変わる」ことです。もちろん「変わる」ことには、否定的な側面もあります。老いつつあるときの嘆きは、

若いときの自分と変わってしまったことに尽きるかもしれません。しかし嘆いていても仕方ありません。その「変」を祝福として受け止めることができたなら、どんなに素晴らしいことでしょうか。そして何よりも「変」の主体は神様です。神様が変わえてくださるのです。春の例会のときに出席者から「身体によみがえり」を信じることは判る。けれども老いて醜くなっていく身体です。身体のあるらこちらに痛み、そして不自由を覚えます。どのような身体でよみがえるのでしょうか、と問われました。この問いに集中して例会を持ちたいと思うほど、深刻かつ大事な問いです。この問いについて、パウロは次のように「フィリピの信徒への手紙」3章21節で記しています。

「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」

私たちは主イエスと同じ「栄光ある体」に変えられるのです。それがどのような体かは定かではありませんが、祝福された体であることは間違いありません。「栄光ある体」に変えられることに希望を託しつつ、残された日々を生きていきたいものです。

☆☆教会の行事☆☆今までに行われた行事

9月30日(日) 高齢の方々に配慮した礼拝

10月21日(日) 子供と共に守る礼拝(CS合同)

*写真:右(礼拝後、子供たちの歌のプレゼント)

右下(渡邊牧師の子供達に向けての説教)

11月4日(日) 聖徒の日礼拝

*写真:下2枚(この一年に天に召された方々の写真と共に)



今月のメッセージ

——ホームページページ巻頭言——

ホームページには多くの情報が掲載されています。

ぜひご覧ください

<http://kakinokizaka-church.com>

息子は言った。「お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。」
(新共同訳聖書ルカによる福音書第15章21節)

主イエスがお語りになった放蕩息子の譬えを幼稚園の礼拝で子供たちに話していて、家を出て行くときこの息子は家に残るお父さんに「行ってきます」と言って出て行ったのだろうか、と考えました。おそらく、彼は、もうこの家に帰ることはない、手にしたお金に心奪われて、そして、これからの過ごすことになると思い描いている薔薇色の将来だけを思って家を出て行ったのでしょうか。家に残る父への思いなど一つも残さずに。だから、おそらく「行ってきます」などと言うことは思い付きもしなかったのではないか、と思います。

では、父の家に帰るとき「ただいま」と果たして言えたのだろうか、とも考えます。放蕩の限りを尽して、父からわけてもらった財産をすべて使い果たして、父の怒りを買うのではないかと恐れつつ、しかし自分の帰るところは父の家しかないと戻って来た彼は、元気に「ただいま」などと到底言い得なかったでしょう。父に申し開きする言葉と、赦しを請う言葉で心は

いっぱいだったはずですが。もう息子とは呼ばれる資格はないと。

洗礼を受けて間もないころ、まだまだ大人の食べる御言葉が固くて十分に消化できなかったとき、よく教会学校の礼拝に出席していました。子供向けに教会学校の先生たちが語ってくれる御言葉は、まるでお粥のようにお腹に優しくかったです。子供たちへの説教の中で、牧師が「日曜日の朝、教会に来たら、ただいまと挨拶するのはですよ。そして、礼拝終わって家に帰るときは、行ってきますと言うのです」と語りました。なるほどなと思いました。父の家、神の家としての教会が、わたしたちの生活の中心なのだと実感する言葉でした。

わたしたちは人生の日々の中で、あの放蕩息子のような砕かれた思いを持って、教会へと帰る日々を送り、また家庭へと、学舎、職場へと、社会に、世界に出て行く日々を過ごします。そして地上の人生の終わりには、最後のただいまを言う本当の故郷へと帰るのでしょうか。「わたしたちの本国は天にあります」(フィリピ3:20)。父の家へと帰る日のため、砕かれた、柔らかな、健全な霊を、魂をこの地上の日々の中で備えられたい、と願います。

(牧師 渡邊 義彦)

——編集後記——

- ・川嶋神学生には、修士論文で大変な中執筆をお願いしました。ご自身の体験を通して待ち望む思いの大切さを示されました。待降節にふさわしいメッセージに感謝し、これから遣わされる先でとりわけ主の豊かなお支えを祈ります。
- ・壮年男性の集まり「樫の木会」の報告をしていただきました。テーマが実に時宜に合ったもので、壮年女性の集まり、「いずみ会」「新生会」との相互乗り入れが進んでいることも素晴らしいと感じます。
- ・教会報へのご意見、ご感想をお寄せください。
(編集委員長 井澤浩一)

集会案内

主日礼拝 日曜日 午前10時30分
聖餐夕礼拝 第1日曜日 午後5時
入門講座 日曜日 午前9時30分
教会学校 日曜日 午前9時
(幼稚科、小学科、ジュニアチャーチ)
*ジュニアチャーチは中学生、高校生です。
聖書と祈り会 水曜日午前10時、午後7時30分
日本基督教団 柿ノ木坂教会
〒152-0022 東京都目黒区柿の木坂 1-31-19
電話 03-3717-3870 (教会・牧師館)
03-3723-3870 (ベテル幼稚園)
牧師 渡邊 義彦
協力牧師 松下 恭規